

第13回全国和牛能力共進会第8区（去勢肥育牛）出品候補牛確保に向けた取組み

東部家畜保健衛生所 ます だ た かし か す や ま こ と  
 舛田 崇 糟谷 淳

【背景】

令和4年10月に開催された第12回全国和牛能力共進会（全共）の第8区において、本県は、出品牛の選考にゲノミック育種価（G育種価）等を活用して優秀な成績を収めた。家畜保健衛生所（家保）は、出品対策委員として協力し、本県和牛ブランド「みかわ牛」の知名度向上に寄与した。

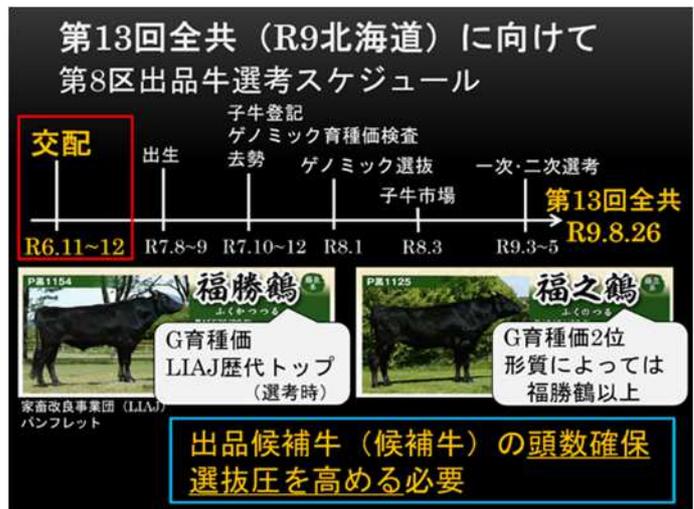
令和9年8月に開催される第13回全共に向けて、第8区出品牛生産のための交配が本年11月から12月に行われた。種雄牛を持たない本県は、家畜改良事業団でトップクラスのG育種価を持つ「福勝鶴」及び「福之鶴」を使用した。

前回に引続き上位獲得を目指すためには、出品候補牛（候補牛）の頭数をより多く確保して選抜圧を高める必要があった（図1）。

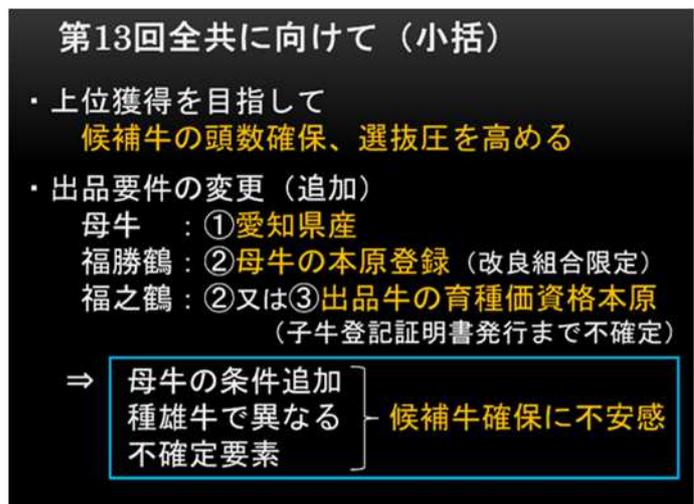
また、第13回全共では、地域の特色ある牛づくりの観点から出品要件の変更があり、第8区においては、①母牛が愛知県産であること、②出品牛の父又は母のいずれかが本原登録牛であること又は③出品牛が本原登録の産肉能力育種価条件を満たす「育種価資格本原」であること、が追加された。

今回使用する「福勝鶴」は、本原登録がなく、供用開始から日が浅いため育種価が確定しない可能性が高いことから、②母牛の本原登録が必須となり、使用が改良組合内に限定された。同様に「福之鶴」も本原登録がないが、育種価が確定する見込みであることから、②母牛の本原登録又は③出品牛の育種価資格本原が必要となった。

出品要件の変更に伴い、主に母牛側の条件が追加されたほか、種雄牛によって条件が異なること及び育種価資格本原のように子牛登記証明書発行まで候補牛が確定しない場合があることから、生産者から候補牛確保に不安の声があり、課題として認識された（図2）。



（図1）第13回全共（R9北海道）に向けて第8区出品牛選考スケジュール



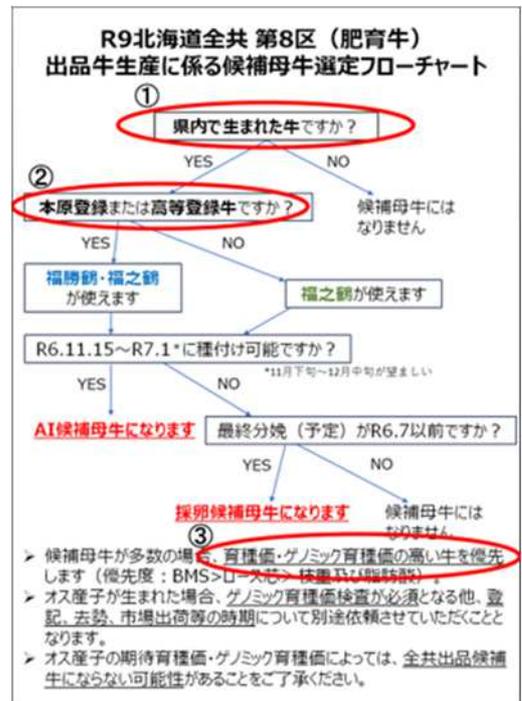
（図2）第13回全共に向けて（小括）

【対策】

候補牛確保のため、出品対策委員会として以下の対策を実施した。

- 候補牛を生産可能な母牛（候補母牛）のリストアップ及びフローチャートの作成

県内の育種価判明牛から、出品要件である「本原登録牛」及び「産子が育種価資格本原となる可能性の高い牛」を候補母牛としてリストアップするとともに、育種価未判明の高性能牛を拾い上げるために、候補母牛選定のためのフローチャートを作成し、県和牛改良協会各支部を通じて生産者への説明に活用した（図3）。



- 畜産総合センター受精卵の活用

畜産総合センター三河高原牧場では、愛知県産の本原登録牛を多く繋養しており「福勝鶴」を使用することが可能である。また、和牛受精卵事業を活用して、改良組合以外の地域でも「福勝鶴」の候補牛を生産できることから、畜産総合センターに対して、候補牛となり得る受精卵（全共対策卵）の生産及び有償譲渡（譲渡）が行われるよう協力を要請した。

センター内で検討の結果「みくな23」、「みくり23」の2頭で「福勝鶴」を使用した全共対策卵が生産・譲渡されることとなった。2頭ともに高いG育種価を持つことに加え、新たに判明した遺伝的~~不良~~骨格粗大症（仮称）が陰性である点もセールスポイントとなった（図4）。

（図3）候補母牛選定フローチャート

全共対策卵の譲渡は第12回全共の際にも行われたが、生産者への周知及びフォロー不足等により候補牛生産には至らなかった。前回の反省を踏まえ、今回は家保から①生産者への事前周知、②譲渡後の説明（候補牛出生後のタイムスケジュール等）を実施することとし、27卵の全共対策卵が譲渡された。候補牛生産に意欲的な生産者が多かったものの、受卵牛の状態や子牛販売価格等タイミングや条件が合えば、といった生産者もいたことから、今後も丁寧な説明及び継続的なフォローが必要と考えられた。

**対策2：畜産総合センター受精卵の活用**

- 三河高原牧場  
本原登録牛⇒「福勝鶴」使用可
- 和牛受精卵事業  
候補牛となり得る受精卵（全共対策卵）の有償譲渡（譲渡）

「みくな23」  
枝重 B、BMS A  
「みくり23」  
枝重 B、BMS H  
\*2頭とも「骨格粗大症陰性」  
（新しい遺伝的~~不良~~形質、種雄牛の保因状況不明）

（図4）畜産総合センター受精卵の活用

【今後の展望】

全共での上位獲得は、「みかわ牛」の知名度向上に寄与するとともに、本県の肥育技術の高さ、肥育素牛及び繁殖母牛の優秀さをアピールするものであり、市場の活性化にもつ

ながる。

また、候補牛生産は去勢肥育牛で本牛のG育種価が判明する数少ない機会であり、データ蓄積を進めることで、本県の和牛肥育技術の一層の向上に資することができる。

さらに、種雄牛を持たず雌側からの改良が主である本県の和牛改良においては、候補母牛や全共対策卵の産子は高G育種価である可能性が高く、候補牛とならない雌であっても、農場の牛群整備の中心として活躍が見込める。